

# 港北区の区政懇話会

商工業問題を中心として

加藤真知子

## 一 区政懇話会のスタート

区政懇話会は各区で区の自主事業の一環として、昭和五十六年度にスタートした。イベント的色彩の強い自主事業が多い中で、テーマを設けて継続的に話し合いをするための場として位置づけられている。区内の各界・各層の住民、関係者および専門家を選任し、区長や関係局区職員も加わって自由に意見を述べ合うというのが基本だが、各区独自の形式・方法で展開している。

港北区では当初は降って湧いたような話にとまどいもあったが、郊外区として解決を迫られている問題はいくらもあった。紆余曲折の末、最初のテーマは「区

の福祉と医療」ということになった。港北区は現在、区の一人当たりの病院ベッド数が一七五床と、一四区中でも最低であり医療環境がかなり悪い区である。当時、総合病院建設の計画が明らかになつていった。経営主体が労働福祉事業団、つまり労災病院と発表されたことから、総合病院として的一般性・妥当性・運営方法などについて、区民の関心が高くなつていたからである。このテーマは二年続き、話し合いの成果は報告書にまとめられた。

## 二 商業問題懇話会

五十八年度のテーマを選定する段階に

至つた。テーマとメンバーの選定で内容の大筋は決まってしまうから、ここは重大なポイントである。

区を巡るさまざまな問題は、究極的には「まちづくり」という根本的な命題に突き当たってしまうのだが、どのような視点から切り込んでいくかが問題だ。港北区は港北ニュータウンや新横浜地区の開発、地下鉄の延伸など大きな事業を抱えているので、区としての独自性を打ち出すために検討しなければならぬ課題がたくさんある。しかし他局などがすでに取り組んでいる問題は、新たな方向性を出すことが困難なのでひとまず脇へ置き、今ままであまり区と接触のなかった分野について考えるのも、一つの方法では

- 一 区政懇話会のスタート
- 二 商業問題懇話会
- 三 工業問題懇話会
- 四 区政懇話会のねらいと問題点
- 五 可能性の展開
- 六 としてシンポジウム
- 七 まとめ

ないかということになった。

その結果、浮かび上がってきたのが区の経済活動である。経済といっても第一次産業から二次・三次までであるが、中でも地域により密着し、しかもこれといった特徴がなく、何となく沈滞ムードの漂よう商業を取りあげることになった。話し合いをより具体的なものにするために地域を絞り、それまで商店街づくりと呼ばれるようなことにあまり積極的でなかった日吉を中心課題とした。中小企業事業団の事業調査課長に座長を依頼し、日吉をはじめとする区内商店街関係者・自治会関係者・消費者と局区職員合計二〇名がメンバーと決定し、スタートした。

図-1 日吉地区

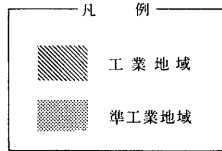
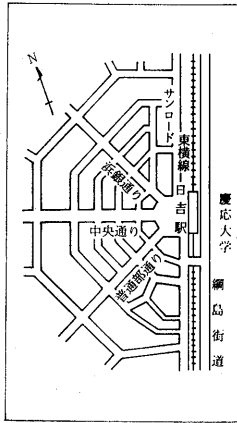
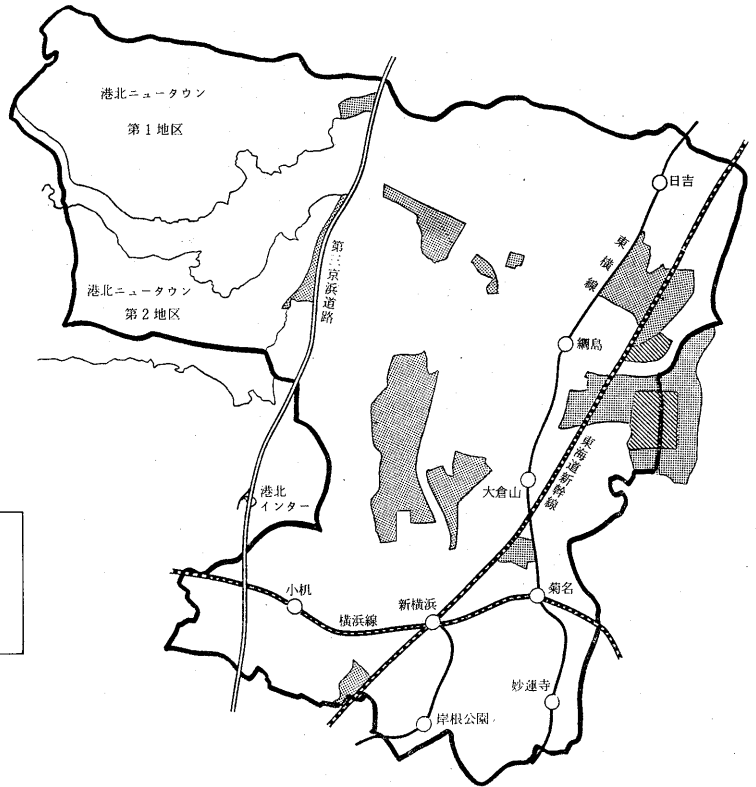


図-2 港北区の工業系地域図



スタートしてから、それほど深い意図をもって選んだわけでもない日吉商店街が、実は非常にユニークで、多くの可能性を秘めたまちであることが次第に明らかになってきたのである。

まず特徴を並べてみる。

①慶応大学がある。従って若い人が多くネームバリューが高い。地域住民の年齢層も比較的若い。

②駅前から五本の放射状道路が伸び、面的な広がりを持っている。これは圧倒的に一本道の商店街が多い中で貴重な素材である。

③後背地に住宅が広がり、高級住宅街としてのイメージが定着している。住民の平均所得は横浜市の中でも高い。

ところが、現実にはこれらの要素がすべてマイナス方向に作用してしまっている。購買力が高いから商店街側はこれまで何の努力もなしに売り上げ高を伸ばしてこられた。五十七年度の一㎡当たりの売り上げ高は、市内八二商店街中で第一位と、意外に高い結果であった。

学生が多いためか、商店街に占める飲食店の比率が非常に高くなっている。しかし、実際にはまちの中に学生の姿はそれほど多くない。駅前から道路が五方向に伸びているためと、マグネットストアがないために客足が分散し、回遊性も生み出していない。

スタートしてから、それほど深い意図をもって選んだわけでもない日吉商店街が、実は非常にユニークで、多くの可能性を秘めたまちであることが次第に明らかになってきたのである。

まず特徴を並べてみる。

①慶応大学がある。従って若い人が多くネームバリューが高い。地域住民の年齢層も比較的若い。

②駅前から五本の放射状道路が伸び、面的な広がりを持っている。これは圧倒的に一本道の商店街が多い中で貴重な素材である。

③後背地に住宅が広がり、高級住宅街としてのイメージが定着している。住民の平均所得は横浜市の中でも高い。

ところが、現実にはこれらの要素がすべてマイナス方向に作用してしまっている。購買力が高いから商店街側はこれまで何の努力もなしに売り上げ高を伸ばしてこられた。五十七年度の一㎡当たりの売り上げ高は、市内八二商店街中で第一位と、意外に高い結果であった。

学生が多いためか、商店街に占める飲食店の比率が非常に高くなっている。しかし、実際にはまちの中に学生の姿はそれほど多くない。駅前から道路が五方向に伸びているためと、マグネットストアがないために客足が分散し、回遊性も生み出していない。

まず一歩踏み出すため、とりあえず次年度予算編成に向けての区要望のうち「日吉駅周辺の魅力あるまちづくり」として重要事項に盛り込むことにした。その結果、五十九年度の経済局の商店街診断事業の実施に結びつけることができた。区の商業問題懇話会は一年で終わっ

表-1 商業問題懇話会開催状況

回	年月日	テーマ
1	58. 7. 7	港北区の商業の現状と日吉商店街の特性について
2	8.10	消費者からみた商店街の姿
3	10.12	まちづくりへ向けての商店街の果たす役割
4	11.28	まちづくりの果たす役割
5	59. 2.15	相模原市西門商店街見学会
6	3.21	横浜市商店街診断について

地価が高いので、商売に意欲のない人はビルを建ててテナントに貸してしまおう。その結果、ナショナルチェーンの店がどんどん進出してきて、駅を降り立つと真っ先に目につくのはマクドナルド・文明堂・亀屋万年堂といった具合である。売り上げ高の伸び悩みを嘆いていた地元商店街の委員たちは、一つ一つ示し出された事実になんか驚いた。では、先細りを回避するために、地元は行政はどうすれば良いのかという方向へ話は進む。

たが、具体的事業へ向けての足がかりはできたわけである。ただし、この診断事業は純粹に地元の要望に基づいて行われているわけではない。日吉商店街全体がまちづくりへ向けて軌道に乗るために、今後若干時間がかかりそうである。

### 三——工業問題懇話会

五十九年度のテーマは必然的に区の工業ということになった。

メンバーは座長を通産省の外郭団体である日本立地センター調査第二部長に依頼し、学識経験者として東京工業大学社会工学科助教、その他区内企業経営者、地元地権者など順次決定した。

港北区の工業は非常に特色がある。五十八年度工業統計によると、事業所数は従業者数四人以上事業所で一、三九八と市全体の二二・四%を占め、一四区中ダントツの一位である。ところが、製造品出荷額となると六位になり、さらに一事業所当りの出荷額は一〇位になってしまふのである。いかに中小企業が多いかの証明である。

一方、先端技術産業・ベンチャービジネス・研究開発型企業等いわゆるハイテク産業といわれる事業所が数多く立地しているのも港北区である。ゴミゴミした町工場、あるいはちらほら畑が混じる中

表一 港北区の工業（58年工業統計）

	事業所数	従業者数	出荷額
横浜市	6,250	199,852人	57,464億
対比	107.9%	100.5%	95.8%
港北区	1,398	31,471人	5,604億
対比	115.5%	105.6%	106.8%
構成	22.4%	15.7%	9.8%

に、その分野では世界的シェアを誇る企業が立地していたりするのである。

しかし、工業は親会社と下請けという受注のタテ関係の結びつきは強いが、同一地域に存在する企業同士のヨコのつながり、あるいは地元とのつながりは大変希薄である。商業やサービス業が、地域に根ざした活動をしない限り利潤を上げることができないのとは大違いである。

問題はここである。そんな独立志向の強い一匹狼を相手に区は一体何をすれば良いのか。いや、何ができるのか。しかも工業関係の事業は経済局が直接行うので、それまで工業界と区とのコンタクトはほとんどなかった。（区役所と企業との接触は課税・工業統計の調査などごく限られたものである。）

「町工場がゴチャゴチャと並んでいるなあ」と眺めているだけで、そこではど

んな工場が何を作っているのか、どんな経営状態なのか全く分らなかった。中堅あるいは大企業がより良い環境を求めて区外へ出ていくのを、そしてその跡地にマンションがどんどん建つのを、呆然と見ていただけである。（その結果として、当然生じる住工混在による公害問題は、直接区の窓口には持ち込まれるのだが。）

表一 工業問題懇話会開催状況

回	年月日	テーマ
1	59.10.3	港北区の工業の現状について
2	12.6	異業種交流について
3	60.2.1	零細企業の育成策について ～御霊地区の貸工場を中心として～
	3.6	シンポジウム “ハイテクゾーン港北を考える” ・基調講演 中村秀一郎専修大教授 「先端技術産業と地域社会」 ・事例報告 区内ハイテク企業3社
4	4.11	工業問題懇話会のまとめと提言事項について

そこで、工業界と区との関係をもう少し太いパイプにすることはできないか。区の産業・経済の活性化について区なりきないかと、五十九年度のテーマ設定の

運びとなった次第である。

### 四——区政懇話会のねらいと問題点

区政懇話会は、各区においてそれぞれ解決しなければならぬ問題について考え、より良い地域社会を目指してさまざまな意見を述べ合っている。その討議内容を報告書にまとめ、そこから区長が参考となるような意見を取りあげるといった形がオーソドックスである。しかし単に報告にまとめたというだけでは、コストの割にあまり実りが少ない。

一方、予算権を持たない区にとつて、それらのことを論議することはどのような意味があるのだろうか、という疑問が残る。悪くすると、地元の顔役を集め、単なる顔見せに終わってしまうし、区長や関係局の職員を通じて、出席者に市の方針を伝えて終わってしまうことにもなりかねない。もう一歩進んで、委員の見から区の方針をまとめ、それをもとに局に対して事業化を要望していくこともできる。しかし、そのような単なる橋渡しで御役御免となつて良いのだろうか。さらに一歩先へ踏み出す方途はあるのだろうか。

もう一つ別の疑問がある。五十九年度は工業振興について話し合いを進めてい

るが、一方で経済局には「みなと経済振興懇談会」という、長期的展望に立つて市の経済を考える組織が厳然と存在し、さまざまに機能している。その中で工業は当然中心課題の一つであり、調査を重ねてあらゆる角度から可能性を探り、各種の報告書が出されている。要するにお金のかけ方が違うのである。

調査費用を持たない区政懇話会にとつて、頼れるものは各委員の経験から出される意見のみである。確かに、体験から出てくる言葉には重みがあるし、自分自身のことを話してこそ価値があるとも言える。しかし、個人的な経験の中におさまっている限り飛躍的な論議の発展は望めない。初めから限界の分かっていることをあえて始めなければならぬ理由は何だろうか。

## 五——可能性の展開

区の自主事業の最大の利点はひもつき予算でないという点である。自由な発想が楽しめる枠である。先に区政懇話会には調査費すらないと書いたが、庁内の合意さえ得られれば、全額を調査費に当てることも不可能ではない。(ただしその調査結果をもとに、次に何を企てるかの能力は別問題であるが。)

区の強みは地元とのつながりの深さに

ある。例えばそれが町の古顔であろうと、年齢的にも層的にも限られた一部の人たちであろうと、区民は入れ代わり立ち代わり区役所へやって来る。その気になつて話を聞けば、彼らの口から出る言葉は行政側にとって全て魅力に満ちた情報である。それらの情報の多くは対応者が個人レベルでセレクトしてしまっているわけで、漏れてしまい、永久に戻つてこないものもあるだろう。

区政懇話会という場で、一つのテーマについて自由に討論することは、そのテーマに限つてのことではあるが、さまざまな情報を出席者全員でチェックすることになる。二〇人前後というごく少数の人数ではあるが、さまざまな方面から選任しているのので、出てくる意見は各々の利害を反映してバラエティーに富んでいる。また、少数数であるため、テーマについて突っ込んだ話し合いができる。

地元区の主催という気安さが会議全体を支配し、テーマの深刻さに似合わないラフな雰囲気での議論が進むこともある。会議での話題を持ち帰り、別の会合や近所の人たちとのよま話の際に話題となり、さらに波及していく、という効果も期待できる。

日吉では区政懇話会が契機となり(商店街診断事業の受け皿づくりという意味もあるが)、商店街・町内会・消費者な

どが中心メンバーとなつて(「仮称」日吉再開発協議会)をつくり、日吉商店街活性化のための方策を考えることを目的として活動を開始した。ここに参加する人の数が次第にふくらみ、慶応の学生なども加わつてくれば、活動はおのずと活発になるだろう。多分、勉強会的性格のものから出発するであろう会の内容も充実し、多彩な企画がポンポン飛び出してくることも予想できる。

とかくまちづくりというと、都市計画とか再開発とかのハードな部分のイメージに固定されがちである。しかし行政が関与せず、住民の手による「まちづくりを考える会」は、今後その活動が非常に楽しみである。地域住民が自らつくり出すまち——日吉らしい、日吉の主張が全面的に押し出されたまちの実現に向けて、何とか頑張つて頂きたいものである。

工業について言えば、地域で何らかの経済活動を行おうとする時、今後は利潤追求一辺倒というわけにはいかなくなるだろう。地域全体の活性化を考慮し、地域住民の生活様式、意識の変化に歩調をそろえ、住民の要求と企業の目的をある一点で交差させないと、限りなく悲劇的なことになる。

区内中堅企業経営者の何人かが、感想として次のようなことを述べていた。「横浜の地主は最悪だ」と。

「彼らの多くは、都市化の中で農業によって生活することを断念させられ、結果として土地を金儲けの手段としてしか見ることができなくなつてしまつた」と。企業が敷地拡大のため隣接する畑を買う計画を立てても、地主はその工場が何を作り、業界でどのような評価を受けているか、などということは全く考えない。ひたすら土地を高く売りつけることのみを執着するのだそうだ。

企業が社員住宅として家の賃貸契約を希望しても、家主は個人としか契約を結ぶことを承知しない。企業側はそこに住む社員が変わるたびに契約をしなおさなければならず、経費がかさんで困るということである。「こんなひどいところはない」というのが彼らの結論である。

現在、区内に立地している企業の中には、高度成長期以前に、住宅地としては魅力の乏しかった土地に、地価が安く、かつ東京に近いからという理由で移転してきたところが多い。ところが、その後の開発で、あとから建つた住宅に公害の発生源として忌み嫌われるようになってしまったのである。これでは、さらによい良い操業環境を求めて工場移転を考えるのも当然のことである。

しかし区としては、地域には企業活動に対する理解をもってもらい、企業には地域に対する関心を深めてほしい。企業

に見限られては困るのだから、調整機能を發揮させ、利害の対立する両者が地域という枠の中で、何とか共存できる方法を見つけなければならぬ。それを地域全体の活性化に結びつけるためにはどうしたら良いかを考える場として区政懇話会が存在し、区が産業界とのつながりを持つことの意義があるのではないか。

区は区なりの考え・方策をまとめ、それを素材として局に提供し、局はそれを可能な限りフォローしていく。事業化について模索し、計画をたて、実施するという過程においても、区が主体性をもって取り組み続けることにより、市民により身近な、きめ細かいサービスを実施できるのではないかと考える。

## 六——そしてシンポジウム

工業問題懇話会は毎回テーマを設定して話し合いを続けたが、固定されたメンバーだけでなく、公開の懇話会を開いてはどうかという案が生まれた。案は次第にふくらんでシンポジウムをやるとういうことになり、テーマは港北区に最近集積しつつあるハイテク企業の地域におけるあり方と決まった。基調講演は中堅企業論、ベンチャービジネス論などで独自の論理を展開している中村秀一郎専修大



ヨンの事例報告も区内のハイテク企業経営者三人が決

定した。問題はどれだけ参加者を集めるからである。呼びかけはまずハガキ作戦をとった。区内の一〇人以上の規模の企業、北工業会に入っている緑区内の企業のほか、金融機関などに計八〇〇枚のハガキを出した。

電話受け付けを明記し、反応を待った。しかし、当初反応は微々たるものだった。申し込み電話は一日に一、二本。作戦の強化を迫られた。まず新聞への売り込み、次いで電話攻勢、新聞四紙に取りあげられたことと企業への直接の電話が効を奏し、申し込みは徐々に上向いてきた。六十年三月六日、シンポジウム「ハイテクゾーン港北を考える」は一〇〇人余の参加者を得て開催された。当初予定の二〇〇人には程遠く、顔ぶれも内輪の市職員や金融機関関係者が目立ち、肝心の工業関係者は三〇余人と期待はずれの少

なさだった。

原因をいろいろ考えた。最近猫も杓子(しゃくし)もハイテク、ハイテクで、「またか」という印象を持たれてしまったのではないか。平日の午後という開催時間が、中小の企業経営者にとって出席しにくいものだったのではないか。区政懇話会主催と銘うったのに企画が区の一方向的なペースで進められ、自己満足的なものになってしまったのではないか。

しかし、つまるところ、いきなり区が今回のようなイベントを実施しても、企業にとっては唐突で、忙しい中を時間を割いてまで出てくる気にはならなかったのだろう。日常的なつながりの積み重ねによってこそイベントも花開く、と実感した。

商業・工業と二年にわたって開催した経済関連の懇話会は、五十九年度でひとまず終了する。工業問題懇話会は今後どのように発展させることができるのか、まだ具体的な青写真はできていない。報告書をまとめる作業もこれからであるが、その提言のうち事業化できるものは何とか実施していきたい。例えば、ハイテク企業懇話会・地域異業種交流・産業会館の建設・工場アパートの建設など案はいろいろある。もし一つでも実現すれば、区政懇話会が種をまいた価値があったと言えるわけで、その存在意義が証明

されたことになる。

## 七——まとめ

「市民に身近な市政の推進」というスローガンは、区役所なくしては存在し得ない。地域住民とのかかわりにおいても区は特に事業を意識せずに日常的な交流を持つことができるから、広い範囲をカバーできる。区はさまざまな方法での住民とのかかわりの中から要望を拾い出し、それを担当局に予算要求していくわけである。

区政懇話会は、はじめから事業化に至るシナリオを書き上げたりえでスタートするわけではない。委員は提案されたテーマについて話し合い、問題点を整理し、そこから一歩踏み出すための考え方を確認するわけである。いわば船出に際しての舵取りの方向を定める場といえる。

今後も区は、区政懇話会がまいた種がどのように芽吹き、育っていくかを見つめ、水のまき方、肥料のやり方などに口を出していくであろう。そしてまた、別の種を見つめるために、区民との日頃の情報交換をシヨシヨと続けていかなければならない。

△港北区区政推進課調整係▽